

成人の儀式～お姉さんが童貞達を卒業させる聖なる風習～（前編）
体験版

この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。
実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

女：川下 喜美

田舎の冬は寒い。生まれてから何度も経験しているはずなのに、慣れることはなかった。
東京はもっと寒かった。
いや、もっと別の寒さがあった。
駅の改札を抜けると、大勢の人が周囲に無関心なまま、あちこちへ流れていく。
色んな目をした人がいたが、その中には死んだ魚のような目をした人も多かった。
無機質に立ち並ぶビル。
人、車、電車。
それが、東京の朝の光景だった。
大学進学を機に東京へ出た頃は、見るもの全てが新鮮で、胸が高鳴っていた。
だが、慣れてしまえば、どうということもない。
そこにあるのは、冷たく無機質なもののばかりだった。
今の私の生活には、それがない。
見えるのは、どこまでも広がる田畑と、ぼつぼつと建つ民家。
たまに見かける泥だらけの軽トラさえ、なぜか愛おしく思える。
外へ出た時に吸い込む空気も、美味しかった。
「やっぱり、私はこっちの方が向いてるのかな……」
白い息と共に、ぼつりと呟く。
庭に停めてある車へ乗り込み、今日も仕事場へ向かった。
高校在学中に、こっそり取った車の免許。
東京では、一度も使うことのなかったものだ。
ペーパードライバーに優しい田舎道を、ゆっくりと走らせていく。
小さな工場へ着くと、車を止め、エンジンを切った。
ドアを開けると、従業員のおじさんが声をかけてくる。
「おっ！喜美ちゃん。おはよう」
「おはようございます」
年配の職人さんだ。
歳が離れているからか、下の名前で呼んでくれる。
こちらも丁寧に挨拶を返す。
向こうも愛想よく笑っていた。
けれど、長話をするのではない。
挨拶を交わせば、それぞれすぐに持ち場へ向かう。
東京では、会社へ行けば朝の雑談に付き合わされることも多かった。

けれど、ここにはそういう空気がない。

工場とは別棟の事務室へ入る。

「おはようございます」

「川下さん、おはよう」

返事をしてくれたのは、社長の奥さんだった。

この会社は家族経営なのだ。

椅子に座り、仕事の準備を始める。

奥さんは、もう作業に取りかかっていた。

自分もPCを立ち上げ、今日の仕事を確認してから、静かに手をつけていく。

これが、いつもの日課だった。

いや、自分で日課にしてしまったのかもしれない。

この会社には残業がない。

だからこそ、このくらいは別に構わないと思っていた。

自分の時間を優先できる。

それが、何よりありがたかった。

親に無理を言って東京の大学へ進学し、そのまま東京で働いた。

なのに、何かに満足してしまったのだろうか。

それとも、何かが足りなかったのだろうか。

どうして地元へ戻ってきたのか、自分でもよくわからない。

彼氏と別れてしまったから？

そう考えてみても、どこか違う気がした。

思い返しても、決定的な理由がない。

ただ自然と、この土地へ戻りたくなかったのだ。

今日も始まる。

いつもの日常。

けれど……もう考えるのはやめだ。

仕事に集中、集中。

昼食前になると、お茶の準備をする。

社長の奥さんと一緒に。

奥さんは人当たりが良く、世間話をしながら、寒い中で飲む熱いお茶を用意していく。

そんな時間も、不思議と苦ではなかった。

昼休みが始まると、小さな食堂へ従業員たちがやってくる。

東京みたいに、お洒落な店でランチをするような光景は、この田舎にはない。

一人ひとりに、お茶を配っていく。

「ありがとう」

職人さんたちのその一言が、少し嬉しい。

けれど同時に、胸の奥が少しだけ痛んだ。

彼らは、こんな寒さの中でも、暖房のろくに効かない工場で、ずっと作業を続けているのだから。

私は暖房の効いた事務室で仕事をしている。

東京にいた頃は、こういうことを意識したことなんてなかった。

みんな暖房の効いたオフィスで、モニターを見ながら仕事をしていたからだ。

食事が終わり、職人さんたちが工場へ戻っていくと、奥さんと二人で後片付けを始める。

「川下さん、こんなところじゃ出会いなんてないでしょ？」

少し申し訳なさそうに、奥さんが言った。

確かに、ここは小さな会社だ。

しかもいるのは、年配の職人さんばかり。

「え、ええ……。でも、みなさん本当に優しくしてくれますから」

「みんな、川下さんだから嬉しいのよ」

それは、たぶん本当だった。

お茶を渡すだけで、工場で見せる真剣な顔が、途端に好々爺みたいになってしまうのだから。

「若いっていいわねえ」

皮肉で言っているわけではない。

それがわかるから、返事に困る。

「うちみたいな会社でも、若い子が一人いるだけで、おじさんたちは嬉しいのよ」

奥さんは、くすくすと笑った。

「は、はあ……」

「川下さん、しっかりしてるし、仕事もできるし、可愛いし。うちに息子がいたら、絶対紹介してたのになあ」

思わず、曖昧に笑ってしまう。

こういう距離感にも、少しずつ慣れてきている自分がいた。

そういえば、社長夫妻には娘さんしか子供がいない。

跡取り問題とか、どうするんだろう。

少し気にはなるが、そこまで踏み込んで聞くつもりはなかった。

「いえいえ、そんなことはないですよ。私、まだミスも多いですし……本当に申し訳なくて」

「しっかりしてる方よお。前に入ってきた人なんてねえ——」

そこから、奥さんの愚痴が始まった。

やはり田舎は人手不足なのだろうか。

なかなか“ちゃんとした人”が入ってこないらしい。

私は愛想よく相づちを打ちながら、後片付けを続けた。

仕事はきっちり定時で終わる。

この会社には残業がない。

だから終業時間になれば、そのまま真っ直ぐ家へ帰るだけだ。

……とはいえ。

遊ぶ場所もない。

飲みに行く相手もない。

そもそも同僚と呼べる人すらいないし、会社の従業員はみんな自分よりずっと年上だ。

地元の友達も、ほとんど県外へ出て行ってしまった。

帰ってきたのは、私だけ。

家へ戻ると、自室のPCを立ち上げる。

軽くネットサーフィンをして時間を潰す。

母が夕飯を作ってくれるまでの、いつもの暇つぶしだ。

ふと、思うことがある。

——こんな日常で、本当にいいのだろうか、と。

「もうちょっと刺激が欲しいなあ……」

モニターから目を離し、天井を見上げながらぼやく。

その言葉は、静かな部屋の中へ溶けるように消えていった。

ある朝。

私はパジャマ姿のまま、二階の自室から一階へ下りた。

「……おはよう」

目をこすりながらリビングへ向かう。

すると、珍しく父がいた。

しかも、ただいだけではない。

真剣な顔をしていた。

地元で公務員をしている父は、普段なら私より早く家を出ているはずだ。

向かいには母も座っている。

どこか落ち着かない様子で、表情が硬い。

嫌な空気だった。

自然と、胸の奥がざわつく。

「どうしたの？」

そう聞かけると、父がゆっくりこちらを向いた。

「喜美……」

その顔には、複雑な感情が浮かんでいた。

哀れみ。

同情。

けれど、それだけでもない。

うまく言葉にできない何か。

「どうしたの、お父さん？ 何かあったの？ 仕事は？」

「今日は休暇を取った。喜美も休め」

「えっ……どうして？」

「いいから、取りなさい」

低く、強い口調だった。

父の様子から、冗談ではないことだけはわかる。

私は小さく頷き、そのまま二階の自室へ戻った。

スマホを手に取り、会社へ電話をかける。

休む理由は、適当にごまかした。

普段、突然休むようなことはない。

だから会社も、あっさり休暇を許してくれた。

有給扱いにはなるが、少しだけ罪悪感を覚える。

普段から優しくしてくれている会社だからだ。

まだ半分眠っている頭を無理やり覚醒させるため、キッチンでコーヒーを淹れる。

父と母は、相変わらず真剣な顔で、一つの封筒を見つめていた。

その中に何が入っているのか。

何か、よくないことがあったのか。

胸の奥が、じわりと落ち着かなくなる。

愛用のマグカップにコーヒーを注ぎ、少しだけ牛乳を入れる。

それを持ってリビングへ戻り、椅子に腰を下ろした。

一口、ゆっくり啜る。

苦味と温かさが、ぼんやりした頭に広がっていく。

「……どうしたの？」

今度は、私の方から切り出した。

「喜美……」

母も深刻そうな顔をしている。

「その封筒、誰から？」

「霧島さんのところからだ」

父が静かに答えた。

この町で、“霧島”という名字の家は一軒しかない。

代々、この町の町長を務めてきた名家だ。

今は表立った立場から退いているが、それでも裏での影響力はかなりのものだと聞いている。

「その霧島さんから、どうしたの？」

問いかけても、父も母もすぐには答えなかった。

二人とも答えてくれない。

父は役所でもそれなりの役職に就いている。

そんな父がここまで困った顔をするなんて、霧島家が何か厄介なことを言ってきたのだろうか。

「喜美……」

母が何かを言いかける。

だが、

「いや、お母さん。俺から説明する」

父がそれを制した。

一度、湯呑みの緑茶を口に含み、ゆっくり息を吐く。

この町には昔から、“成人の儀式”というものがあるらしい。

それは、この小さな町で、童貞のまま成人式を終えた青年を“大人にするため”の儀式。

つまり——選ばれた女性が、その青年たちと性行為を行う風習なのだと。

父は言葉を選ぶように、かいつまんで説明した。

「……あるのは知ってた」

小さい頃、噂話のように耳にしたことはある。

けれど、まさか。

「それで……私が選ばれたってわけ？」

つまり、その“成人の儀式”で、私がお相手を務めろということ？

「……そういうことだ。なんで、喜美が……」

——続きは本編で。